

第2回「選択する未来」委員会
中長期的な経済成長発展
: 日本は何で稼いでゆくのか

2014年2月14日

日本経済研究センター理事長

岩田一政



発展のメカニズム

1. 新古典派成長理論

「条件付き収束理論(conditional convergence)」はどこまで該当するか? : 「絶対的収束理論」は技術の公共財的性格を前提。

技術全要素生産性と制度に収束傾向はあるか? : 過去200年は「偉大な乖離」(great divergence)だったか?

人的資本蓄積、知識資本の蓄積をどのように評価するか?

経済のみならず政治、社会の諸制度の質の差をどのように評価するか? : 全要素生産性の水準の差に影響を与えるか?

サマーズの「自然利子率マイナス論」(長期停滞とデフレ・リスク)をどう評価するか?

発展のメカニズム

2. 技術革新の役割

ニューエコノミーは終焉したか？ : ロバート・ゴードンの予測ではアメリカは2050年までの平均成長率はゼロ。

2025年までの破壊的技術は何か？ : 12の技術と頭脳労働の置き換え(「第二の機械時代」)。

技術革新の担い手は誰か？ : 大企業とベンチャー・ビジネス、大学の役割。

医療分野の技術革新(次世代ゲノム、ロボット、インターネット・オブ・シングス)とデータベース活用(難病治療、長寿化による医療費増加予測)の重要性。

発展のメカニズム

3. 人口動態と経済成長

人口ボーナスと人口オーナス。

人口構造転換期におけるバブルの発生。

人口減少・高齢化と貯蓄率、技術革新、市場規模の拡大。

人口減少に歯止めをかけることは可能か？：
フランスの例とアメリカの移民。

発展のメカニズム

4. 新たな国際分業のあり方

付加価値でみた貿易の重要性。

グローバル・バリュー・チェーンの重要性: WTO
バリ島での部分合意(貿易円滑化)。

メガ・リージョナリズムとグローバル・バリュー・
チェーン(TPP, 日本-EU, RCEP, FTAAPなど
日本は中心にいる:ほかにTTIP, TISA)。

眠れる中小企業の活力。

オフショアリング(BPM含む)とリショアリング。

発展のメカニズム

5. マクロ・バランスの維持

家計貯蓄率が大幅なマイナスになることをどう評価するか？

更新投資需要の評価と資本蓄積。

財政部門の安定化のための措置：2020年度基礎収支均衡目標は達成不可能か？政府債務・名目GDP比率の安定化目標設定の必要性。

社会保障制度の抜本的改革の必要性：公的年金制度の部分的民営化と医療のIT技術活用による効率化。

経常収支赤字化の評価。

発展のメカニズム

6. 中所得のワナ、貧困のワナの克服

自立した技術革新の実現: アジアにおける中所得のワナ、とりわけ、中国。

非西欧諸国の技術取得は増加しているが、そのスピードは西欧諸国と比べ鈍化している。

世界全体のジニ係数は低下しているが、各国間のジニ係数は上昇している。

先進国における格差: 日本における相対的貧困の増加と縮小しない地域所得の格差。

アジアにおける2つの逆U字曲線: 格差と所得水準ならびに成長率と所得水準。

IT技術革新は所得格差を拡大するか?: 中所得層の没落と教育の重要性。サックスは悲観的。

発展のメカニズム

7. グローバルな環境・エネルギー制約
気候変動に対する政策。

グローバルな最適エネルギー経路の選択：アジアにおけるエネルギー供給体制（天然ガス、再生エネルギー、電力送電網のネットワーク）。

水素エネルギーの活用と水素社会の実現。

発展のメカニズム

8. 経済発展とファイナンス

金融深化と過剰なファイナンス：影の銀行システムの役割。

日本はアジアにおける金融センターの役割を果たすべきか？：国際通貨体制の将来。

金融危機に対して頑健な金融システムの構築：マクロプルーデンス政策と金融政策：レバレッジ規制の重要性。